

# 西区を支えた産業の歴史



屯田兵が琴似に入植し、百三十年以上が過ぎました。

自給自足を目指し、試行錯誤を繰り返して開拓を行った先人の苦勞を、旧琴似町を中心とした産業の変遷からご紹介します。

## 屯田兵と開拓使

屯田兵は、北海道の警備と開拓のために設けられた屯田制の兵（広辞苑第五版より）のことです。明治二年、諸外国などの脅威から北海道を守り、ほとんど未開の地であった北海道を開拓するため設置された開拓使が、屯田兵を置き、開拓を委ねたのです。

この屯田兵は、明治八年の琴似への入植から始まりました。琴似の屯田兵は、主に旧仙台藩士や旧会津藩士からなり、合計二〇八戸が現在の琴似に屯田兵村をつくりました。

## 養蚕と麻作り

明治三年、開拓使は仙台から持ち込んだ蚕を野桑で養って見たところ予想以上に繭ができたので、当時最も活気の

ある産業であった養蚕に力を入れ始めました。明治十年には琴似にも養蚕室ができ、明治十二年には琴似の収量は札幌の全収量の三分の一を占めていました。しかし、桑苗を移植した上、当時は他の作物に肥料を施すことがないのに、馬糞、人糞などの肥料をやり、冬には冬囲いをしなければならぬなど、手間の割に収支が合わず次第に縮小していきま

ました。同じころ、北海道の漁業の漁網を毎年大量に本州から買入れていたので、この漁網製作を開拓者の冬の副業にさせ、その原料の大麻を夏に耕作させようと開拓使は考えました。

明治七年八月に開拓使は製麻奨励の方針を発表し、琴似では明治十一年から耕作が始まりました。最初は大麻の出

来も非常によく、二十一年頃には栽培面積が約六十畝に達し、漁網や麻裏草履などを作っていました。しかし、元来大麻は非常に地力を消耗させるため、次第に成長が悪くなった上、周囲の森林がなくなつて風当たりが強くなり風害を受けようになりました。そのため明治二十二年から二年連続でフランス種を輸入しましたが発芽が悪く、大麻耕作は急激に減少していきました。



▲明治8年中央区北1西8に設置された札幌養蚕室（北海道大学附属図書館蔵）

▲JR琴似駅北側に建つレンガ館。かつては食品工場だった（左下）

※樺太開拓使が置かれた明治3年2月～4年8月までは、北海道開拓使と称した。